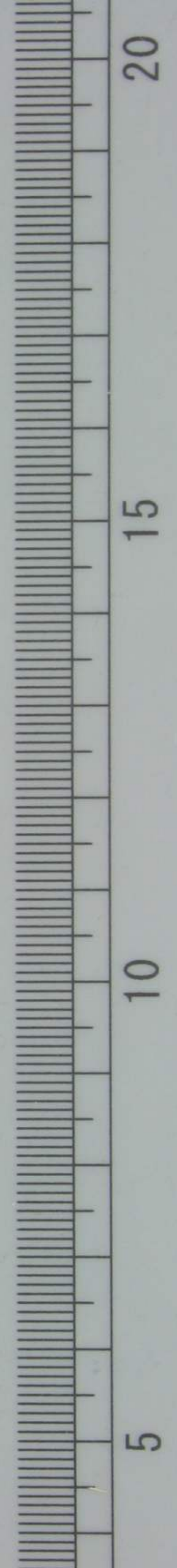


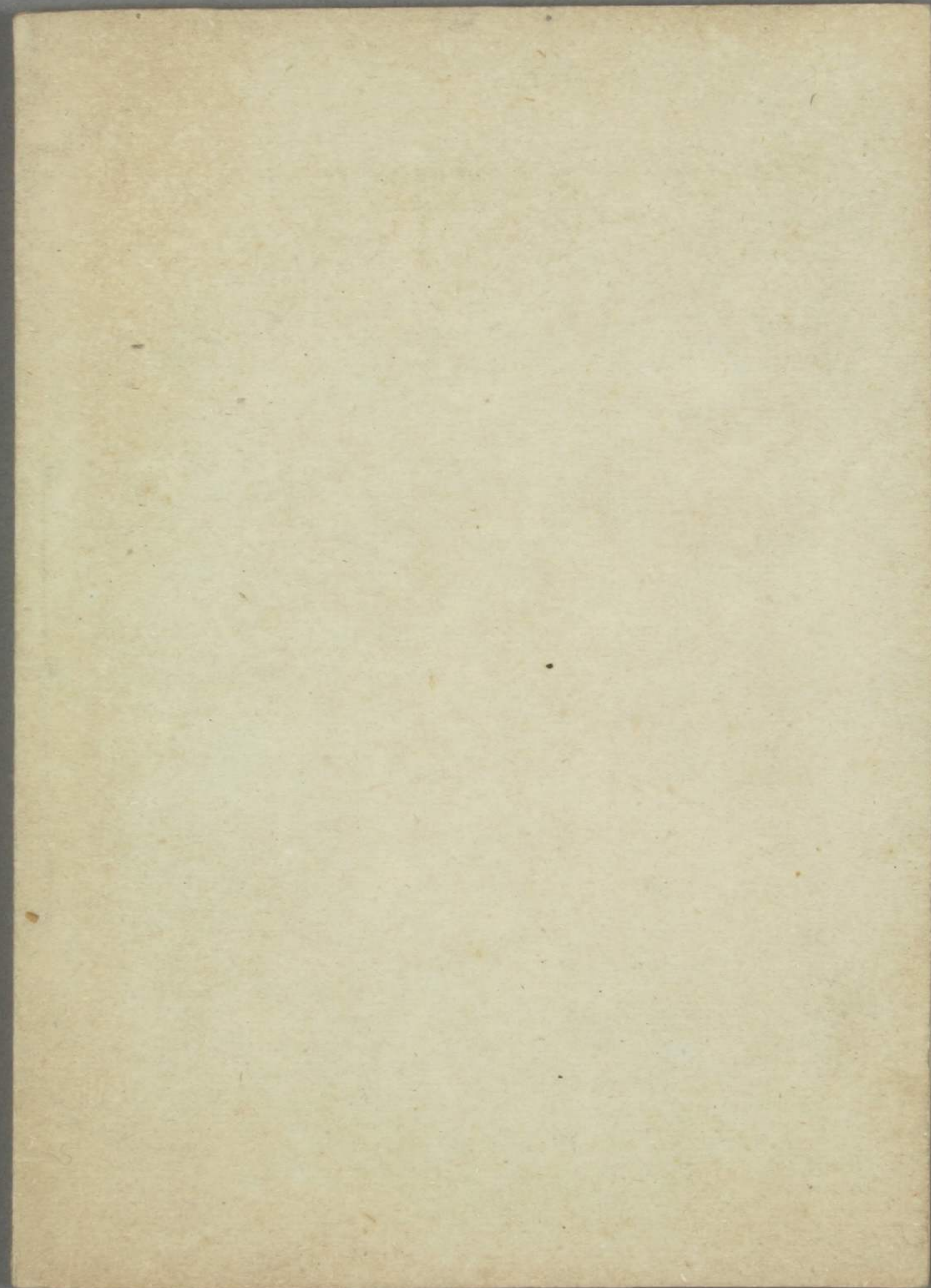


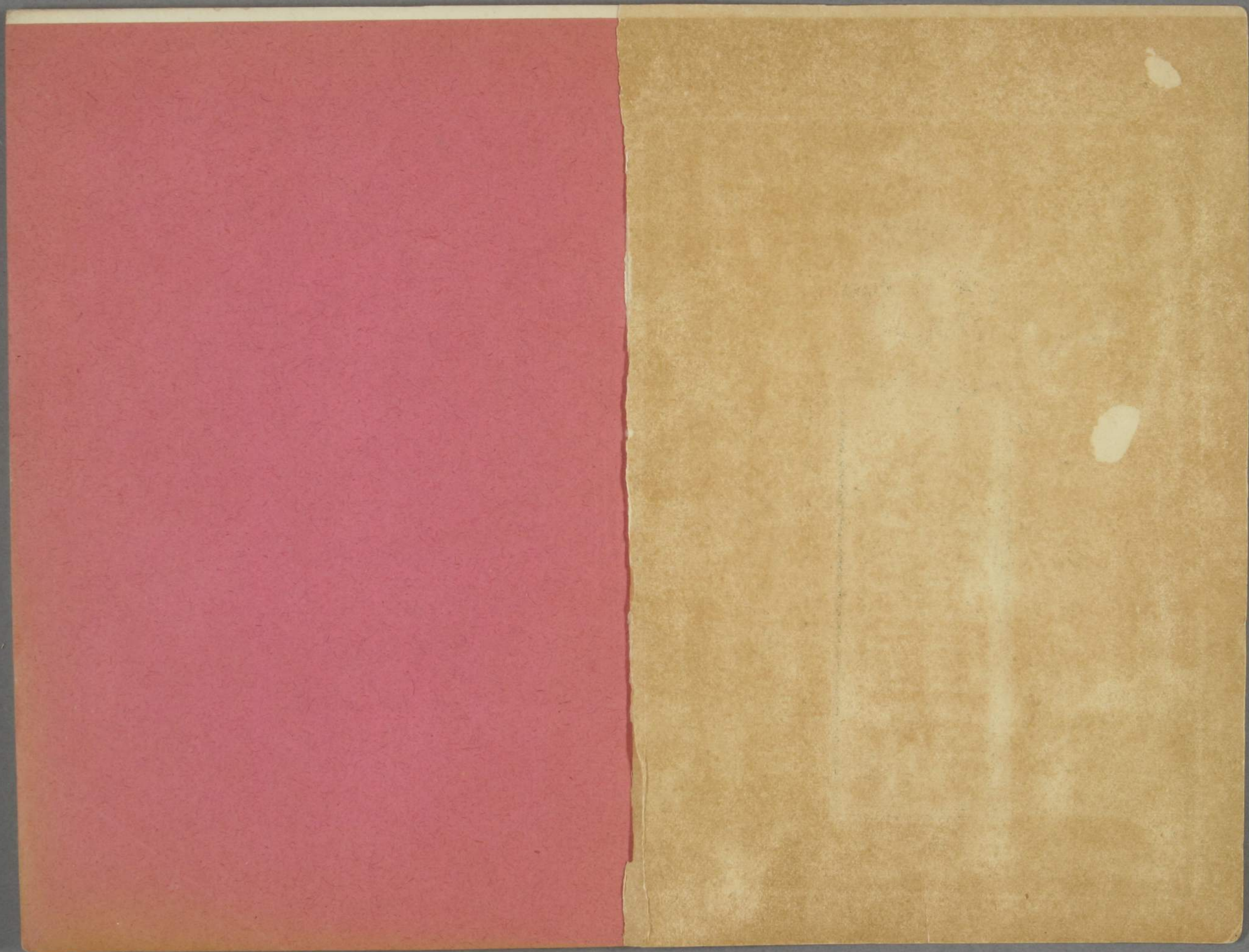
現代軍歌

城北匹夫編

東京松榮堂發行







劍の光り輝きて

蹄の音はいと高し

すゝめや行けや我勇士

譽れの旅に死出の旅

連捷戰 日清戰鬥軍歌目錄

◎上欄之部

- 緒言
- 清兵牙山より上陸す
- 朝鮮政府革新の緒に就く
- 牙山占領
- 龍山凱旋
- 平壤陥落
- 臨時議會
- 九連城陥落
- 天長節
- 民政廳
- 東學黨蜂起
- 我兵直り京城より入る
- 豊島海戦
- 宣戰公布
- 威海衛砲撃
- 黄海大勝
- 第二軍進發
- 大島公使歸朝井上公使更代
- 金州城の陥落
- 旅順占領

◎下欄之部

- 磨てや懲せや
- 丈夫
- 我が武
- 往け往け日本男兒
- 成歡驛
- 喇叭卒
- 中和の朝風
- 船橋里
- 黄海大捷(其一)
- 老壯士
- 第二師團の軍歌
- 鴨綠江
- 旅順占領
- 北京まで
- 遼慮
- 日清開戦
- 豊島沖の海戦
- 牙山占領
- 威海衛
- 平壤大捷
- 玄武門
- 黄海大捷(其二)
- 佐藤大佐ノ軍歌
- 皇軍の衛生團
- 九連城と鳳凰城の陥落

岡田辰次郎
熊田子之四郎
兩先生著

中等教育 支那歴史

洋裝美本全壹冊
紙數三百十頁餘
正價七十七錢
郵稅六錢

此書の永く文科大學に在りて東西の史學を究めたる岡田、熊田兩先生の著述
よして其體裁の兩先生の創意よ出で頗る嶄新なり其目的とする所の中等教
育に適合せしむるに在るを以て其文平易簡明にして能く事實を悉せり其價値
の此は喋々を要せず大方の君子一讀あらば自ら公評あるべし

中等教育 漢文軌範

鹿門岡千仞校
聚亭蒲生重章閱
鎮南羽田安政編
荃江河野通之編
甘陰下森來治(纂)

半紙本和製
前編全二冊
本編全三冊
正價各三十五錢宛
郵稅一冊六錢宛

本書ハ中等教育漢文讀本中最モ其當ヲ得タルハ夙ニ大方ノ高評アリ今更喋
々ヲ要セズ嘗テ大日本中學會及ビ明治義會尋常中學校東京府高等女學校其
他各府縣尋常師範學校中學校ノ教科用書ニ續々御採用ノ恩命ヲ蒙レリ依テ
此際尙一層印刷製本等ニ改良ヲ施シ一ハ以テ江湖ノ恩顧ニ對ヘ一ハ以テ斯
書ノ普及セシムルヲ期セリ冀クハ四方ノ諸彦試ニ一本ヲ購ヒ其誣言ニアラザ
ルヲ知リ給ヘ

發行元

東京日本橋區
橋町一丁目一番地

松榮堂書店

日清戰鬪略記

◎緒言

振古以來未だ
曾て有らざる
明治の偉業は
已よ其効を収
め今や又快絶
壯絶の奇觀を
博して歴史上
永く我帝國
の勇武絶倫を
るを止めんと
す我國民たる

連戦 連捷
日清戰鬪軍歌

城北匹夫編

○膺てや懲らせや

○其一

膺てや懲らせや清國を 清ハ御國の讐なるぞ
東洋平和の讐なるぞ 伐ちて正しき國とせよ
御國の權利を妨ぐる 傲慢無禮の敵を伐て
東洋平和の義を知らぬ 蒙昧頑固の敵を伐て
うちて懲せや清國を うちて懲せや清國を

○其二

もの豈あも奮發ふんぱつ
蹶起けつきせずして
可かあらんや
茲こゝ又日清戦争
の概況がいきやうを述べ
聊いさゝか以て奮發
蹶起けつきの一助じよと
せむ

◎東學黨蜂起
對馬の西海上
十里を隔て砂
たる一半島國

あり北鴨綠江
を限りて清國
と境し山深く
人厓わがあり之を
朝鮮と云ふ
朝鮮名獨立の
体を維持すと
雖も閔族權を
擅はしりして民
力疲弊し氣息
奄々として半
ば死したる如
し於是乎憂國

膺てや懲せや支那兵を
御國の高誼を蔑視する
其數如何か多くとも
武器の形は揃ふとも
豊島沖の海戦に
成歡役の陸戦は
斯くも碎くる軍艦と
たどひ幾萬ありとても

◎北京まで

御國に双向ふ支那兵は
政府を助くる弱兵ハ
概ね烏合の族のみ
畫ける美人は異ならず
彼の軍艦を碎けり
彼の軍隊ハ破れたり
斯くも破るゝ軍隊ハ
いかに我に當るべき
膺てや懲せや支那兵を

支那も昔は聖賢の
代を易へ歳を経る儘は
口は中華と誇れども
其蒙昧を破らずば
時こそ來れいざ來れ
北京の城は押し建て
是ぞ名はぶ日の本の
皇御軍競ひつゝ

◎丈夫

教ありつる國あれど
次第に開化の後しさり
心の野蠻は反比例
我東洋の夜は明けじ
豊榮昇る旭の旗を
無明の闇を照すへし
皇御國の務めなる
進めや進め北京まで
我丈夫は山行かば
草むを屍海往かば

の死士仁人は
今や坐視すべ
きよあらずと
し席旗を立て
全遷の山川
よ呼号し貪婪
飽くなき地方
官を攻殺し進
で京城よ向ひ
菲政を革新し
國家百年の計
を爲さんどす
之れ則ち東學

黨あり
嗚呼世其心中
の憐れむべき
東學黨よ勝る
ものやある千
載の汚名を恐
れずして朝廷
よ向ふの止む
を得ざるの心
事誰か一滴を
愛まざらん然
れども此意匠
慘憺たる經營

水つく骸と昔より
人生僅か五十年
名を汚すべき事やある
君に捧ぐる命ぞや
敵の矢玉を背よ負ふ
進みくくて顧みず
東洋平和の守護神と
進めや進め益荒雄よ
夫れ此たびの戦は
たゞ朝鮮の爲ならず
誓ひて國に盡しけり
命惜みて萬代の
息ある限り進み撃て
國の譽を増す身ぞや
面を向けて進み往け
斃れて止まぬ魂は
末の代かけて祭られむ
進めや進め益荒雄よ

◎叡慮

東洋前途の安寧を
叡慮の程を畏みて
君の御爲め國の爲め
軍旗の許はすめらぎの
健氣に働さ叡感に
また上官の命令の
水火の中も弾丸の
此精神だに撓まずば
黄金の鷄も雲井より
平和乃基礎を永遠に
圖らせ給ふ叡慮なり
此目的を遂ぐるまで
平和の讐を夷けよ
玉座の前に均しきぞ
あづかることを心掛け
畏さ勅語と服従し
雨や霰も厭ふあよ
如何なる事か成ざらむ
赫奕く勳功を待あらむ
建て、勳功を完くし

この此又日清の
 開戦を促がし
 朝鮮の革新を
 胚胎せり否東
 亞細亞全局の
 文明を惹起せ
 り東學黨たる
 もの又其初期
 を達せりと云
 ふべし
 東學黨蜂起の
 報朝野又喧傳
 するや四民は

歡喜して之れ
 又之を如何と
 もする能はず
 全州陥り京城
 又危殆の地位
 又立つ及ん
 で朝鮮總理交
 渉通商事宜と
 して在韓せる
 袁世凱は閔族
 と結托し巧み
 又國王を籠絡

叡慮を安んじ奉り
 凱歌を揚げて歸るべし

編者曰く、以上の四題は陸軍參謀本部の編纂に係るものにして、征清の我軍
 隊をして之を唱へつ、進軍して、一層の勇氣を鼓舞せしむるにあり參謀本
 部の編纂は只此四歌に止まらず尙ほ後にも出せり

◎我が武

叡聖文武の我が君の
 一とび逆鱗まゝはして
 亡狀極まる清國に
 向つて大に膺懲乃
 典を挙げさせ給ひけり
 陸海軍の勇士ハ
 叡慮の程を畏みて
 向ふどころに秋風の
 木の葉を拂ふ如くにて
 伐ちて取ざるとはあく
 攻て勝ざることいなし
 旭日乃御旗ひるがへし



して清兵の來援を請はしめたり

◎清兵牙山

又上陸す

抑も袁世凱が國王よ迫りて清兵の來援を請はしめたる深意を採ぐる又清國は曾て我國及佛國よ對し朝鮮は獨

四百餘州の暗がりの時は來にけり來りけり我勇猛の振舞よ畏敬の念を起しつる地球の上よ輝けり

◎日清開戰

進めや進め我か兵よ問題種々よ分るれどろもく韓土は我國の思へば神功皇后や

迷の雲を吹き晴らす宇内列國打ち擧り驚愕嘆賞せざるなく我が日の本の御光りは地球の上よ輝けり

いま我か國の外交は日韓事件に如ざるなき關門城壁啗ならず豊臣時代の昔より

立國よして毫も關係あるものよあらざるの通知をおしたりと雖も朝鮮八道を郡縣とさし己か領地とさすべきことは清の希望する所於是乎名を東徒鎮撫よ託し清國の屬邦ある事

關係深き國なるぞ保護し置かずは將來よ見や清國キヤンくか談判終に調はで進めや進め我か兵よ出て功名博するはこの機失すること勿れやまと男兒の日本刀名分正しきこの戦天地よ耻ることぞあき

いまこの國の獨立を國の大事や起るらん無名の兵を率さ來りこよ戦端開けたり海外諸國の大舞臺これ千歳の一遇ぞ年來久しく鍛へたる斬れ味見するは此時ぞ正々堂々勇み立ち今よ蛆虫キヤンくを

實を天下しめに示さんとしたる
され如此いんけんに陰險
ある手段しゅだんの下
遂すいに一音おんの電
信しん袁えんより李鴻
章しやうに達するや
一千五百の清
兵は葉志超はしちやう聶
士成しせいの号令ごうれいの
下くわうりふきに黃龍旗を
翻ひるがへしつゝ、牙
山さんに上陸じやうりくした

千里の外そとに打ち拂はらひ
義氣ぎきある國と千歳の
男兒おとこの愉快ゆきわいこの事ぞ
四百年來この方かたに
大戦たいせんするは始めてぞ
日本の國威こくゐを八宏はこうに
進めや進めや我兵よ
わの戦勝せんしやうの祝砲しゆくばうと
彈丸だんぐわん飛とんで雨あめを爲なし
わか戦勝せんしやうの血祭ちまつりりと
思へは彈丸何のその
朝鮮國ちやうせんこくをもり立て、
下に譽ほまれを流ながすのは
進めや進め我か兵よ
國を踏ふみ出でし海外かいがいに
國の榮辱はうじやく定さだむるも
輝かがやかすのもこの一舉きよ
山をも崩くづす大砲たいぱうも
思へは大砲何のろろ
鮮血せんけつ流ながれて川がはあすも
敵乃亡てきはなぶるそれまでは
御國ごこくの爲ためなり君の爲め
御國ごこくに爲なり君乃爲め

り時維これ六月

某日

○我兵直けいよ
京城けいじやうに入い
る

清國兵を韓地
よ出すや明治
十七年の天津
條約じやうやくより出
兵へいの儀ぎを通知
したりと雖も
痴鈍ちどんある清國
は全く我神州

進めや進め我か兵よ
死しとも退しりぞくこと勿なき
死しとも退しりぞくこと勿なき
御國ごこくに爲なり君乃爲め

◎往ゆけ往ゆけ日本男兒やまとだんじ

外山正一氏作

○第一節

往ゆけ往ゆけ日本男兒 千歳せんさいの一遇いっぐぞ
開ひらく闢ひらくの昔むかしより 鍛きたへたる我の腕うで
試ためす今いまの時 失うしふなこの機き會くわい
神かみの敵てき、人の敵 うち殺ころせこの腕うでで
起たて丈夫ますらを往ゆけ丈夫 往ゆけ天下あまねを周まわる武勇ぶゆうを示しめせ

の國民よ一種
特稟の氣魄あ
るを忘れたり
思へらく他國
の事件は痛痒
相感するかけ
んと何ぞ知ら
ん彼か東藩鎮
撫の爲め出兵
するある眼中
日本國あき父
獨立國ある朝
鮮國あき我儘

勝手ある通知
の達するや當
時歸國中の大
鳥公使は警官
二十五名を引
卒し六月廿五
日東京を出發
し二十九日仁
川に着し即夜
雨を冒して京
城入り翌日
我廣島師團の
駐兵一旅團仁

○第二節
知らざるか我が敵を

大惡の人非人

大國汝こそ誇り

小國をこそ侵す

野蠻をばこそ極む

非道をはこれ盡す

不義乃賊詐偽の賊

亡ほせや亡ほせや

起て丈夫往け丈夫

往く天下を周く武勇を示せ

○第三節

惡むべし我が敵の

惡虐は比類なし

辜あきを虐殺し

婦女子をを辱かしむ

汝には母なき歟

汝よと妻あき歟

泣く姉妹泣く子あり

其聲を聞かざる歟

起て丈夫往け丈夫

往く天下を周く武勇を示せ

○第四節

敵軍の兵卒は

強盜か豺狼か

彼は我が母の敵

彼を我が妻乃敵

我の姉妹女子の敵

神國の清き血を

敵軍乃畜生に

穢さるること勿き

起て丈夫往け丈夫

往く天下を周く武勇を示せ

○第五節

うちころせ大砲で

文明の大敵を

川又着し其一
部は即日京城
又進發して仁
川京城間の要
害一日よして
我掌裡又歸せ
んとは

◎朝鮮政府
革新の緒
又就く
我兵遽か又京
城仁川又駐屯
するよ及んで

哀及閔の恐慌
は如何ありし
終に閔は擅
よ清兵の來援
を求めたるを
彈劾せられ其
職を退くよ至
り閔黨大よ其
勢力を失し開
化黨漸く其首
を擡ぐるよ至
りぬ於是乎我
大鳥公使は先

衝き崩せ劍をもて 蠻族に巢窟を
東洋の文明を 進むるは我か力
撃てく突けく 君の爲め國の爲め
起て丈夫往け丈夫 往く天下又周く武勇を示せ

◎豊島沖の海戦

○第一章

傲慢無禮の清國は 彈丸黒子の小國と
我を侮る蔑視しか 我未だ彼と絶ざるよ
我か軍艦を豊島の 沖に要撃しぬりけり

○第二章

我か住む國は小さくも 我か國民は少かくも
日本魂持つものは 汝の亡狀甘んじて
あとか受へさいでよいで 我か技倆こそ顯はさん

○第三章

忽ち萬雷轟きて 修羅乃怒濤を漲らす
不意の攻撃物とせず 應戦ふせし我か海兵
難かく敵船高陞を 打ち沈めぬる心地よさ

○第四章

初めの勢ひ何れよか 失せて逃げゝる廣乙艦
遽てふぬめき淺瀬よと 乗揚げ自滅を招きこる

つ獨立の實を
舉ぐるの切要
あるを勸告し
尋で着々參畫
する所あり大
又其効あらん
とする又當り
彼れ隱險ある
袁は力を極め
て我か施設を
妨げ或は流言
を放ち或は韓
廷を威嚇し閔

○第五章

あれの果こそ己れより
出て、反るの報いなれ
斯くも手痛き攻撃の
我勇猛に敵しかね
進退茲に谷まりて
ヲメくかざす白旗は
操江艦上に翩り
いと容易く捕獲せり

○第六章

手始めよしと一聲に
凱歌を擧ぐ是ぞこれ
吉野浪速に秋津洲
我か艦隊の技倆をば
やぐて示さん時ありと
勇みてこそ引上る

○第七章

嗚呼陸海の勇士等よ
平和は既に破れたり

日本男兒の武勇をば
顯はす時の來りけを

彼か先非を悔ゆるまで
飽くまで懲せ我が勇士

編者曰く、高陞号は軍艦にあらず英國の運送船なり、此行清國の依頼に應じ
清兵一千余を搭載して牙山に送るの途なり、而して操江や廣乙はこか護送
の軍艦たり、委細は上欄豐嶋海戦の項にあり、操江は其後我國に於て乗組
員を定め其名も操江と名つけつゝ今は我か艦隊に編入せらる、敵艦を以て
敵艦を撃つ豈快ならずや

◎成 歡 驛

頃へ水無月初めより
京城内ある我か兵を
水原縣を直指しつゝ
朝日よ輝く日の旗を
押立て出る雄々しさは
敵の有無を探らんと

つ獨立の實を
舉ぐるの切要
あるを勸告し
尋で着々參畫
する所あり大
又其効あらん
とする又當り
彼れ隱險ある
袁は力を極め
て我か施設を
妨げ或は流言
を放ち或は韓
廷を威嚇し閔

黨を獎勵して
遂に開化黨を
閉息せしめ且
我々撤兵を要
求すること再
三
然れども弱を
助けて強を挫
き渾身是膽を
るもの我は斷
乎として彼の
要求を峻拒し
大鳥公使は益

々韓廷又向て
其改革を促が
し且袁を攻撃
して使臣會議
より排斥せし
を以て袁今や
足を京城又止
むる能はず痛
く其素志の水
泡又歸せしを
歎息しつゝ密
又京城を逃去
りける而して

斥候兵を出しつゝ、
安城渡を押し渡り
堅く守れる敵兵を
我勇猛の兵士は
勇と勇みて進み行く
進めや進め我か軍の
守る敵も亂れつゝ、
三たび凱歌を唱へけり
暗さは暗し闇乃夜に
成歡驛れ砲壘よ
一せいに撃破り
彼我乃屍を踏越えて
此處は牙山の本營と
銳くうち出を砲撃よ
苦もなく砲壘乗取りて
三たび凱歌を唱へけり

◎牙山占領

○第一節

京城内又は閩
の指揮に従ふ
韓裝の清兵を
止め七月廿三
日大鳥公使參
闕の途次狼藉
を極めんとせ
しが却て我兵
の敗る所とあ
り大砲小銃を
殘して逃去り
ける而して七
十有三の老英

頃は文月の末つかと
牙山の清兵目がけつゝ、
旭日の旗は朝風よ
旭日よ閃く銃劍を
龍山屯營の我り軍を
勇氣堂々南進す
ひるかへつゝ、勇しく
キラ／＼と勇しく
敵の動靜探り知り
分きて勇み進みけり
氣候異なる國土をも
其の舉動ぞ勇ましく

○第二節

○第三節

雄大院君は再
ひ起て政を
攝し茲は始め
て朝鮮政府大
革新の緒は就
くよ至りぬ

◎豊島海戦
弱を扶け強を
挫き義を以て
死を忘る閩里
の匹夫と雖も
猶且王侯を壓
すべし況んや

堂々たる帝國
正名順言の師
を出し隣邦の
厄を除き幸の
國たらしめん
とするをや然
るも彼は百方
我軍を退讓せ
しめんとし我
か其力して朝
鮮の獨立を扶
け東洋の危運
を制せんと云

海路を取りし一隊ハ
何をも敵の屯守せる
要害地をは難なくも
早くも牙山に近よれり

◎第四章

山路を取りし一隊ハ
七原越へてこれも又
素砂場へこそ進みける
尙ほも銳氣をいや増て

◎第五節

花陽海門貢進倉
行く手の壘打ち取りて
追ひ拂つゝ過ぎ行きて
アナ勇まゝの我の軍よ

貞松險山奪ひ取り
いとも容易く占領し
暫くこゝに足次とめ
進まんものと勇まけり

安城川邊を苦戦なし
瞬くひまに打ち取りて
逃るゝ名を得し敵兵は
守る氣力の失せ果てゝ

◎第六節

我の軍隊ハ一發の
苦もあく占領したりけり
數限りあく分捕り
數萬と号せし敵兵の

◎第七節

成歡城の六壘を
尙もはげしく追まくる
根據となせる牙山をも
洪州さして逃げ落ちぬ

彈丸も費はせ牙山をハ
敵の棄てざる糧仗を
苦もなく占領したりけり
あきの果てこそうたてけれ

へば彼れ頑として應ぜず益々兵備を修め牙山又營を張り且義州路より大兵を南下せしめ腹背京城又迫り我兵を退ひ一舉朝鮮を併呑せんとす於是乎我も又勢又迫られ愈々戦備を

修め危機一髪の間又來れり果せる哉七月廿五日我吉野浪速秋津洲の三艦は豊島の近海に於て清艦の挑戦に應じ激戦一時間餘敵艦操江を捕拿し廣乙を破壊し濟遠を走らし且千百

二手に分れし我か軍のこゝにはじめて會合し飢ゑも疲れも打ち忘れ勇と勇とて諸共軍旗を振つ手を拍ちて天皇陛下の萬歳を三たび唱へて祝ひけり凱歌を擧げて祝ひけり

編者曰く、此戦に於て我か軍は陸軍少將大嶋義昌之を率ひ、中佐福嶋安正參謀たり、敵將は葉士超、聶士成の二人にして、其の最も苦戦なりしは松嶋大尉の率ひたる一隊か安城川邊にての戦にありし、されど此戦の爲め堅固なる成敗も忽ちにして我か手に歸す、蓋し松嶋氏の先登與りて力ありといふべし

◎喇叭卒

○第一章

かの成歡のたゝのひは さして大戦ならねども



の清兵を搭載せし連送船高陸を撃沈せしめぬ日清の戦争茲に開け我國民の元氣大に振ふ

◎牙山占領
遙か豊島沖の砲聲を耳にしつ、龍山倉に屯在せし我陸軍は南の方

知らぬ敵地は岩も樹も
我が進とたる一尺の
草に置くなる露さへも

○第二章

肉あり血ある人の身の
槍の稻妻死のさけび
其音もぬけく吹しける

○第三章

我が喇叭手の源次郎
ふり来る弾丸も數知ぬ

皆死の伏せる處あり
土地もいのちの價ぞや
色紅に染めあせり

躊躇ひ易き弾丸の雨
筒の響きのろの中は
喇叭の号令進めや進め

小高き岡に登り立ち
敵の方たに見りへらぞ

目を隊長に注ぎつゝ、又も号令進めや進め

○第四章

山より落つる瀧の瀬か
敵は得堪で崩きたり
黄金求めん爲ならぞ
身は小なれど膽は大

○第五章

再び起る進撃の
進やすゝと音ハ消ぬ
息切せしかと見返れば
号令未だ半ばにて
如何ハせしぞ源次郎
足よろめきて唇は

牙山に向ひ進發せり時維れ
七月廿九日
牙山は清兵の死守せる所清兵如何に怯懦かりと雖も兩三日の余命を保たんかと思ひし所天師の向ふ所前なくして一撃成歡の敵壘を抜き

進んで牙山の
根據を領す此
日交戦五時問
餘糧仗彈藥

得る山の如し
◎宣戦公布
八月一日清國

又對する官戰
の大詔は下り
ぬ理義明晰日

月星辰と光を
争ふべし超え
て數日清國又

宣戦を布告す
文字浮誇よし
て意氣晦澁外

人評して曰く
日本の宣戦文
は慎重として

嚴正清國の宣
戦文は浮誇よ
して疎慢なり

と
◎龍山凱旋
成歡を屠り牙

山を占領した

猶も喇叭に接しつゝ、
す…す…すめの音は絶々よ
喇叭に傳からくれなる

◎第六章

彼れ斃れたり人々よ
心の色の熱血は
あけに喇叭を染よけり
身も死をとても丈夫の

面々の敵に向ひけり
汝名譽の戦死せり
岡山縣下船穂村乃
住人たりと源次郎

我が大君の御爲ぞや
皇御國の御爲ぞや

編者曰く、此歌は在横濱東方世界新聞記者獨逸人エフ、シユレーデル氏の詩
にして、大山大臣に呈せしものを其筋にて譯せしものなり
源次郎姓は白神、第廿一聯隊陸軍歩兵一等卒たり

◎威海衛

黒烟吐きつ波を擧げ
黃海蹶立て、進み行く
これぞ豊島沖合に
大捷取りし我が艦隊

尙も第二の戦捷を
齎し旋らん首途ある
頃は葉月の早や半ば
處を清國威海衛

要害無比と聞えたる
軍港差して進むなり
守れる敵艦打ち沈め
辛さ目見せんと進なり

我の技倆は怖ましか
早くも敵艦は茲を去り
渤海差して逃げ失せぬ
逃る敵の目あかけず

何かは懲す時あらむ
あゝ見苦しき彼の擧動

る我陸軍は二
千有餘の清兵
を走らし軍器
糧食を捕獲
し潰餘の弱兵
戦鬪の力を
を認め八月八
日を以て師を
龍山に旋す韓
王特使を發し
韓廷凱旋門を
建つ雄容たる
軍樂粲々たる

打ち出す一發砲壘を
見事壞りて悠悠と
後の決戦期しつゝも
班す艦隊我の武勇
如何に敵心寒からむ
如何に敵心寒からむ
◎中和の朝風
一柳安次郎氏作
中和の村は日はおちて
かたわれ月の影すこく
敵はいづこと求むれど
馬のひづめの音をかし
はやしの中に駒あてゝ
ほこを枕にものゝふは
しばしはどろむ木下蔭
夢は何處をたどらん
その夜も更けて日五更
露よすだけける虫の音の
ひぬを止けり稻の葉に
そよぐ秋風もの淋し

劍戟氣已よ四
百餘州を呑む

◎威海衛砲
撃

八月十日拂曉
我艦隊及水雷
艇は渤海灣口
の敵艦を掩撃
するの目的を
以て威海衛を
撃つ敵艦あら
ずあるも或ひ
は去り或は潜

忽ちさこゆる鯨波の聲
耳をつんざく筒のをと
敵か味方かわかぬ間に
烟をみちぬ野は山は
すいこそ敵に夜討なれ
哨兵線をやぶらまぞ
進てやみく討るゝか
この身は君に捧げしぞ
つゝ音またも響きけり
彼方の山のいゝゝきに
敵ハ間近くよせくらし
林ののけにあゑもして
我か兵僅かに七八騎
敵は百もあまるめり
やまと男の兒の銳心は
かゝる時よ示すべき
打亡ほさんへ易けれど
我等ハ斥候騎兵なり
敵を探りしそのうへは
かへらでならト本隊に

む於是乎止む
あく砲臺を破
壊して退く

◎車駕親征

九月十三日大
本營を廣島よ

進められ同十

五日車駕親征

の途又付き給

ふ

子來の臣民は

感泣し海陸の

兵士大又振ふ

思ひは一つとづくと

ゆく手よまたも敵數騎

進むも退くも仇あれや

いのちや輕し任おも

筒の音しげく響くなり

いななく馬の聲たうく

夜ハ早あけて日は高し

血をほしぬゝる處く

大和男兒のいかにせし

いまし見どめぬ敵陣の

戦ひつゝもとづくある

劍のふすま立てにけり

右もひだりもつゝの音

いざややぶらん此の圍

劍のひかりひらめけり

流るゝ血汐の川のこと

眺め見渡すおほ野原

ふきゆく風のおま臭や

旅ゆく人にこと問へば

軍門よさらす屍四つ

嗚呼振古以來

我國未曾有の

大快事

◎平壤陥落

九月十六日午

前八時帝國万

歳の聲は平壤

城又響き渡り

ぬ是れ我陸軍

が清國の金城

湯池と頼みた

る平壤を陥落

したる祝聲よ

あはれ中和乃野嵐よ

ふかれて砕くる露の花

吹かれて露とちりよ亮

これぞ男の兒の心なる

編者曰く、中和祥原間に於て斥候衝突の際、戦死し又ハ行衛不明となりて戦死と見做されたる人々は即ち左の如し

歩兵中尉町口熊雄氏、騎兵少尉竹内英男氏、騎兵一等卒赤澤才八氏、全二等卒西壯平氏、全田原八郎氏、通辨佐伯小太郎氏、全小林一氏都合七名なり

◎平壤大捷

參謀本部の作

大同江の廣げれど

忠勇無双の我が軍ハ

險阻を恃みし敵兵は

皇御國の兵士にハ

大城山はさかけれど

苦もなく踰て進みけり

如何に膽を冷しけん

翼ありとや思ひけん

てありし也
先是我陸軍
は四隊に分れ
佐藤大佐の元
山支隊は成川
より立見少將
の朔寧支隊の
麥田店より大
島少將の混成
旅團は黃州街
道より本隊は
大同江を渡り
て新興府より

頃しも秋の十六夜の
月にはひらめく日本刀
砲烟彈雨透間なく
平壤城を攻めよこむ
多勢を恃て敵兵も
道なき隊を治まらざ
暫を交へて防く間も
嵐は木葉と亂れ散る
實は理りや昔より
仁義の師に敵をなく
光り正しき日の蔭を
もろこし迄も輝けり
此勢は乗しなば
凱歌を近き内ならん
渤海灣は深くとも
北京の城は遠くとも

◎船橋里

三光岡警三氏作

共は平壤に向
ひ十五日四面
を包圍攻撃し
十六日午前八
時全く平壤を
奪取したり
是の戦は近時
稀ある大戦を
して日清兩國
の運命の擧げ
て此勝敗をあ
るを以て清兵
の防禦頗る堅

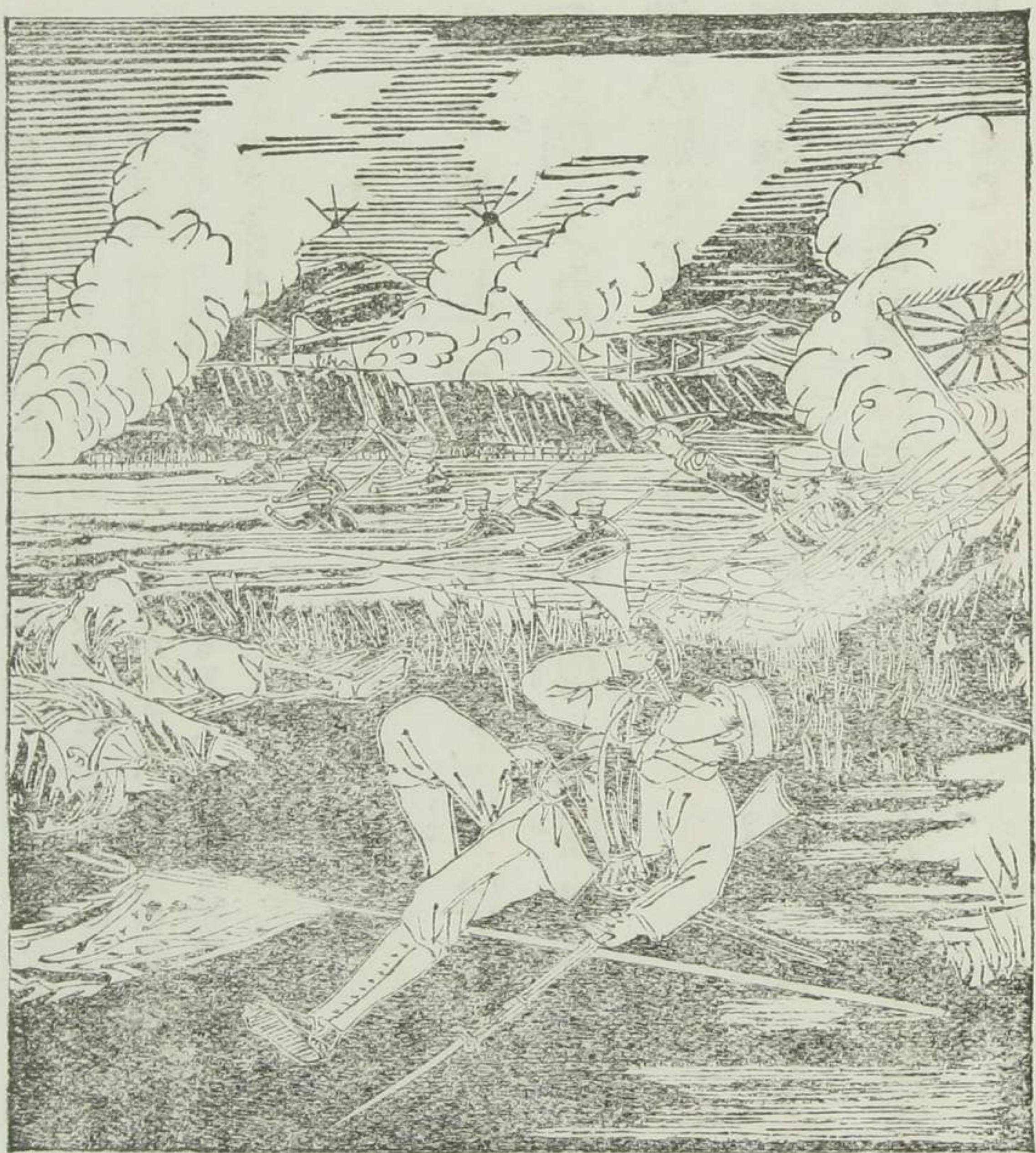
天地に響く砲の音
雲間に閃めく電光
此處を詮度と戦の
庭を亂れて修羅乃場
敵軍如何に衆しとて
縦横無盡に斬りあひけ
篠突く彈丸を物とせず
聯隊旗の立つ處
大島少將此處にあり
此處を我にも要害地
此處を敵にも要害地
日本魂日本刀
祖先の勳功に劣らずに
死地は乘入り功名せよ
君の御爲と國を爲め
死なば諸共死をんとて
聯隊旗の立つ處
大島少將此處にあり

く且地の是れ
 有名ある天嶮
 加ふる軍器
 の精良あるを
 以てす我軍の
 苦戦實は豫想
 外あるを見る
 然るに連戦連
 捷全く之を略
 取し敵將左寶
 貴以下六百名
 を生擒し斬殺
 算なく軍器糧

食は勿論金銀
 塊を満したる
 三十五貫目の
 重糧ある函
 四十個及韓錢
 六万七千貫を
 分捕したるも
 の其れ豈我
 陛下の威稜よ
 よるにあらず
 や又將校下士
 卒の奮戦よ
 るにあらずや

奮戦苦闘の幾時間
 血潮は流れて川となる
 無数の死者も何のろの
 いざや進まんいさ進め
 大島少將此處あり
 天地を動かす歡聲あり
 平壤城は陥るぬ
 着けぬるまゝの少將は
 將士の忠死涙吊しけり
 嗚呼船橋里船橋里

屍は積みて山を爲し
 敵も味方も死者無数
 日本魂日本刀
 聯隊旗の立つ處
 陸軍万歳の聲高し
 鮮血流る征袍を
 熱き涙を落とつゝ
 苦戦の程ぞ如何ならむ



嗚呼我日本の男兒灑け奉天
又向て北京又向て汝か殉國

の血を注け我精神我氣魄我赤誠我熱淚嗚呼是れ以て四百余州を席卷して國威を宇内よ顯揚するに足る
勝報大本營よ

編者曰く、船橋里は大同江の南岸にあり、敵兵壘を築きて決死能く守る、實に要害地なり、大嶋少將此方面攻撃の任に當り、激戦數時爲に彈藥盡くるに至る、平壤陥落に就きて最も激戦せし處、我が軍の死傷亦此處を以て最多とす、其苦戦なりしこと思ふべきなり、然れども其功の最たる又言を俟たざるあり

◎玄武門

城の石垣城の溝高し峻はし、又深く固く閉ぢたる玄武門
進み難くぞ見へにける
忽み溝を乗り切りて
勇敢無双れ我軍も
姓は原田名は重吉
石垣登る人や誰を
鬼神とこそ見見るらむ
險阻をたのみ敵軍は

達するや左の勅語は下り

ね 勅語
朕大本營を進むるの初よ當り我軍大よ平壤よ勝つ報よ接し深く將校下士卒の勤勞を察し速よ特異の功績を奏せしを嘉す

一躍垣を乗り越えて雲霞の如き敵軍の眞只中よ飛び入りぬ腰には首級二ツ三ツ

實よ目覺しき大刀の風城門廣く開かれぬ敵の動揺めく其間隙よ潮乃如く攻め入れり

唖喊してぞ我軍は潮の如く攻め入れり
鳴呼勇ましき武士の類ひ稀ある其手柄
大和男の兒の勇膽と譽は永く傳はらむ

譽は永く傳はらむ

編者曰くこれ又三光子の作なり、玄武門ハ平壤城の東方にありて諸城門中の最も堅固なるものなり、加ふるに敵ハ石垣の間をセメントの類を以て埋

野津中將の
奉答電文

臣道貫常よ其
任に堪へざる
を恐る幸に平
壤を抜きたる
は全く陛下
御威徳の致す
所あり今優渥
の勅語を辱
ふす將校下士
卒皆感泣して
益々奮進一死

め足場なからしむ、我軍爲めに之を陥るゝに困めり、忽ち原田氏二等卒の
身を以て奮然死地に入り、平壤陥落の先登者となる、氏の名譽と共に元山
支隊の名譽ハ幾許ぞや、聞く氏ハ其功により直ちに上等兵に擧げられ其後
二等軍曹に昇進、且つ金鷄勳章を賜はりぬとぞ、嗚呼氏の功は永く我が國
の威名と共に傳へて盡くる時やある噫、

◎豊海大捷(其二)

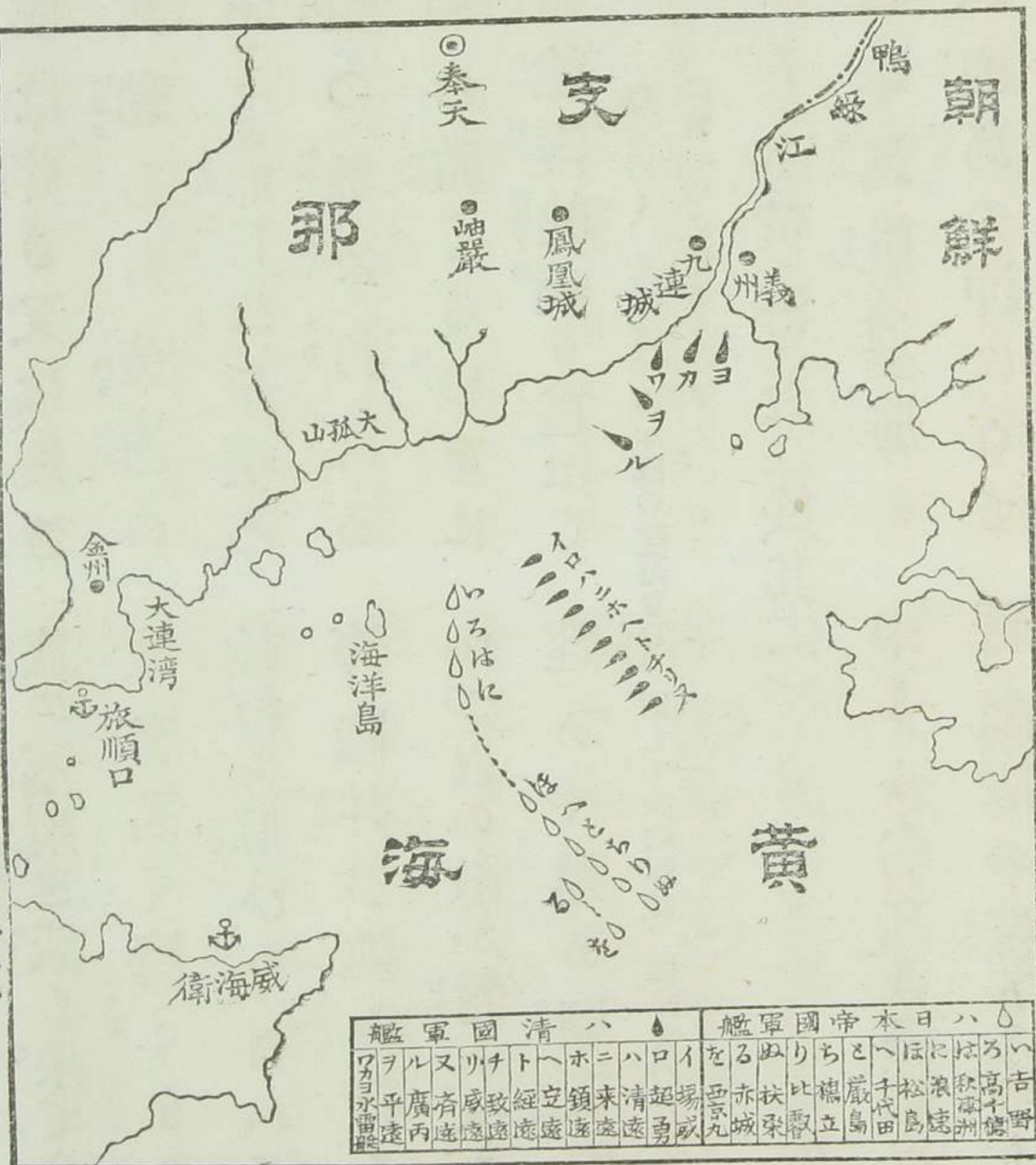
我海軍はいち早く豊島沖に戦ひつ
又も浪路を蹴破りてつよしはいづこ威海衛
彼の北洋の艦隊は名のみ残して影もなく
我聯合乃艦隊ハ海原廣く占めにけり
秋も半を過るころ海洋島の邊よて
端かく起る艦戦逐つ逐はせつ彼乃艦を

以て 聖恩よ

酬ひ奉らんこ
とを誓へり

◎黄海大勝

九月十六日我
海軍は遙かよ
平壤陥落の聲
を聞きつゝ軍
艦松島以下十
二隻大孤山沖
よ向ふ翌十七
日敵艦十四水
雷六隻を認め



同日零時四十
五分より戦を
始めける交戦
凡そ五時間餘
我艦終始列を
乱さず清艦終
つ崩れ立ち來
遠先づ沈没し
て致遠超勇之
又次ぎ士卒多
く帆綱又依り
泣號活を求む
其狀實又悲惨

或は碎き又は焼き
其動しん黄海の
あそを昨日は平壤乃
艦の數々打沈め
神の祐くる皇軍に
直隸海峡乗り越へて
吾軍連戰連勝の中よも名高き海戦ハ
大鹿島の沖にして 吾艦隊の探り得ト

編者曰く、此歌は參謀本部の編纂なり、而して次の歌は、櫻井宮内大臣秘
書官の作に係るものなり

◎黄海大捷(其二)

を極しどぞ
而して定遠經
遠平遠は火災
又罹り狼狽を
極めて逃走し
自餘の敵艦又
奔竄す時又日
漸く没して月
色黒く追撃の
利なきを見天
明廟島又達し
頻り又搜索を
遂げたるも見

敵艦凡そ十餘艘
水つを屍は今あるぞ
烈しく打出す砲聲ハ
見る間に數艘の敵艦ハ
陣勢益々みたれたり
天の助くる我が艦は
暮れ行く空の厭ひなく
追ひつゝ揚る勝鬨の
君は師團の長として
御國を守る大將軍

◎老壯士

當らず於是乎 戰鬪の場所又 歸り敵艦揚威 の委棄せられ 既又人あきを 視魚形水雷を 以て之を撃沈 したりとぞ此 の戦やチルソ ン以來の快戦 又して以て我 威武を宇内又 示す足る而

我の四國の山里に 師團の長と老壯士 國は盡さむ眞心は 奥羽征討れそのかみを わき官軍を導きて こゝよりここに轉戦し 馬齡徒らよながらへて 鬢髮霜を加ふれど むかし覺えし太刀筋を 唐土の野邊よさまよふ夢覺て 餘命をれくる老壯士 位置ころ違へ君とわれ いかで劣らむ將軍よ 思へば夢の夢あれや 會津白河棚倉と 死地よ入るも幾そとび ことしわれも五十八 勇氣ハ未だ衰へず 忘れ果ぬもぬのそいや 枕刀をとどかさし

して清は海軍 の過半を失ひ 我は只赤城其 他二三の小破 損ありしのみ 我海軍の如何 又精銳ある如 何又勇武ある 大孤山沖の波 濤長へよ之を 傳ふるを見る 勅語 朕我聯合艦隊

夜半の叫びに幾度か 此頃聞けは將軍も 昔のよこを忘れそ あたらし命を山里の 埋めはてむも惜くして 將軍願を入きぬまひ 死して榮あり老壯士 この老骨を曝すべき いかよ將軍 具して行かむすべしと 家人の眠りを破りけむ 彼地よ渡りたまそむと われをも具して行玉へ 落葉が中にむざくと 今日おどつれつ君か宿 具して行むとのみはは、 長白の山鴨緑の水 處はいつこと擇ばむや 國よ常備の軍あきは そのおとはりはわれも知る

の黄海又奮戦
し大勝を得た
るを開き其威
力既又敵海を
制壓するを覺
え深く將校下
士卒の勤勞を
察し茲又特殊
の勳功を奏す
るを嘉す

伊東司令官
の電文奉答
聯合艦隊の黄

むかしいむかし今ハ今 大刀三尺横とへて
駒に跨り陣頭に 立あらはれて勇まらま
手柄何げつ、誇らむの 功名心は露もなし
只一片國を愛る真心を 君に捧ぐむ願のみ
やむことあるは兵站の 軍夫と成ても參るべし
こたびの軍に従はゞ 死して榮あり老壯士
いざといは、忽劍を腰よして 草の庵を蹴て起さむ
長白の山鴨緑の水 わきらり爲に好墓田

编者曰く、此歌は落葉王人の作り、老壯士姓は五十嵐名は敬之舊高知藩の人たり、歌中將軍とは山路將軍なり、奥羽戦争の際に共に打連れて戦功を顯はしたるの舊交あり、今回五十嵐氏は其望空しからず第二軍附軍夫百人長の命を受けて滅清せり

◎佐藤大佐の軍歌

海よ於ける戦
勝を聞こし召
され特よ優渥
ある
勅語を賜ふ臣
祐亨恐懼よ堪
へず茲又恭し
く
陛下の萬歳を
祝し謹て奉
答す

◎臨時議會
臨時帝國議會

中よも十八聯隊の 其進撃の勇猛は
怒る阿修羅に異ならむ 所々の砲臺乗り越えて
進む折柄蒼空ハ 磨る墨よりも黒雲の
棚引く間より鳴る神や 篠を束ねて降る雨も
敵を射斃す稻妻も 名残り清ハ嵐野と
皇國を援くる心地して 彈丸雨飛も何のその
調へ揃はて軍歌は 一軍擧げて謠ひつゝ
城壁指して攻め登る 嗚呼勇敢が勇敢が

は十月十八日
を以て廣島よ
開かれぬ議す
る所何事ぞ曰
く軍事公債兵
士慰勞の議案
等滿場拍手喝
采の中又一人
の反對者なく
して通過せら
れぬ而して恐
れ多くも我皇
よは親しく臨

○
去來や進まん戦友よ 山の裂け行き原とあり
海ハ干瀉とあるとても 聯隊旗を押し立て、
盟を城下に誓へて 昇る旭日と諸共よ
綾に畏き皇國の 御稜威を世界よ輝かせ
御稜威を世界に輝かせ

編者曰く、此軍歌は第一軍の第三師團歩兵第十八聯隊佐藤大佐の作にして、清境に攻め入り敵壘に臨む時詠ふこととせられたるもの、内の二節なり

◎第二師團の軍歌

第二師團の兵士の 多くの奥羽の健男兒

ませ給ひて討
清の止むべか
らざるの 詔
勅を下し給ひ
き曰く
勅語
朕貴族院及衆
議院の各員よ
告く朕茲よ臨
時帝國議會を
召集し國務大
臣よ命して刻
下の急要ある

体力壯し氣は豪に 何きの隊よか劣るべき
圖南の鵬翼今振ひ 進めや行けや我師團
皇國乃仁義よ逆て 開化の主義よ悖りつゝ、
平和を破る清國は 龍車に向ふ螻蛄ぞ
其身を知らぬ憐れさよ 時こそ來きいざ來き
東北男兒の鉄腕を 奮はん時ハ今なるぞ
嘗て墮せし名譽をば 揚よや奥羽の健男兒
隊伍は奥羽の良兵士 將も名よ負ふ鬼佐久間
玄蕃に優る武勇あり 虎よ翼も何の其の
圖南の鵬翼今振ひ 進めや行けや我師團

陸海軍費も關する議案を提出せしむ
 朕は清國か帝國と共に東洋の和平を保持するの任を以て遂に今日の事局を見るに至りたるを懋とす然れども豊端既も開く交戦の目的を

牙山は勝ちしは何軍ぞ 平壤取りしは何隊ぞ
 一朝戦地に赴かは ちどか彼等も劣るべき
 第二師團の功名は 平壤牙山の比も非ず
 四百餘州の帝都なる 北京は城へ立よ軍旗
 嘗て墮せし名譽をば 揚よや奥羽の健男兒
 卿の衣を染る血を 正しく奥羽の花なるぞ
 吉野の櫻は散るとても 散ぬは名譽の花あるぞ
 圖南の鵬翼今振ひ 進めや行けや我師團
 今も昔となりつるも 我東北の人民の
 時勢に通せぬ悲しさに 愛國至誠も水の泡

達せずむは以て止むへからす朕は帝國の臣民か一致和協朕か事を奨順し全局の大捷を以て早く東洋の和平を回復し以て國光を宣揚せむことを望む各員其れ旗を最めよ

何時しか負し汚名は 雪くの今の時なるぞ
 劔の林も入るとても 雨なす彈丸潜るとも
 嘗て墮せし名譽をば 揚よや奥羽の健男兒
 雲山萬里を隔てたる 異域の野邊に臥す時は
 吹雪の風に梳り 雲の雨に沐むとも
 圖南の鵬翼今振るひ 進めや行けや我師團
 百萬雷の音よりも 我等の耳朶打ものも
 奥羽の人山百文と 價値を嘲る聲ぞかし
 斯る不快の言の葉と 矇昧野蠻の芥子坊主
 枯し盡さん其迄は 假令水火を踏むとも

嗚呼如何も我皇の震襟を

勞せられ給ふか最とも畏き

ことよこそ

◎第二軍進

山縣大將の率

ひたる第一軍

は連りよ牙山

平壤の敵兵を

蹂躪し劍氣已

嘗て墮せし名譽をハ揚よや奥羽の健男兒
心安かれ我父兄君の御爲め國の爲め
嘗て墮せし名譽をば揚よや奥羽の健男兒

編者曰く、結尾〇點を附したる二句は徐かに高く語ふべき作なりとぞ、而して同師團歩兵第四聯附の某氏の作なり

◎皇軍の衛生團

第一軍衛生部の作

我が大君に統べ給ふ國の守護の軍隊は

今や隣國朝鮮の弱きを扶け兼て又

暴慢無道の清兵を討夷けん其乃爲め

水陸並び進む行く仁義の師ぞ勇まら

蠻賊輩に付隨ふ烏合の兵も多くと

よ四百餘州を呑むよ當り今
又第二軍の組織成りて大山
大將の命令の下よ宇品港を
進發せり已よして十月の終
よ於てハ金州半島花園口上
陸の報よ接す壯ある哉快か
る哉



◎九連城陷落

皇軍の向ふ所
破竹の勢あり
既又清兵を朝
鮮國土より放
逐し鴨綠を渡
りて十月廿六
日九連城を守
れる萬五千の
敵兵をは全く
我馬蹄と蹂躪
し去れり三軍

忠勇無双の皇軍に
況して 天皇の親征よ
旭日の向ふ處には
陸兵牙山平壤に
海よと豊島黃海よ
頓て北京を乗取て
國の譽と大君に
御稜威を世界よ輝る
心 金剛身 鐵石
遠く御國を離れ來て
争でか敵をる事を得ん
天地も爲め感動し
靡ぬ草木もなかり覺
彼の大軍を打ち破り
彼の堅艦を打ち沈め
十八省を服はせ
御稜威を世界よ輝らせ
我大君の軍隊に
恐る、敵ハ無きとも
異なる土地を跋渉し

當時の光景如
何よ快且つ壯
ありしぞ

◎大鳥公使

歸朝井上
公使更代
韓山の風雲よ
久しく盤根錯
節の功を重ね
帝國の威信を
遙かよ鷄林の
野よ映射した
る大鳥公使の

雨よ浴し日に曝し
晝は終日夜もすがら
海よの瘴癘妖邪乃氣
透間を狙ひ寄せ來るを
兵士乃健康保護するの
烈しき戰濟みしとき
勝ち勇とたる團体の
此時味方の戦友の
敵を破りし勳章の
折柄駈來る衛生團
岩を枕に草薙
事忙しきそか上に
陸には風土傳染病
防ぎ戦ひ打ち掃ひ
偏よ衛生團ぞあり
敵の四方に散亂し
隊伍を整へ凱旋す
彈丸矢石を冒しつゝ
創痍の數は身に満ちぬ
傷者を勞はり扶け行き

十月某日を以て歸朝せられ井上馨氏其後を襲ふこと、ありぬ余輩は前公使の功勞を謝し新公使の健全あらんとを祈るものあり

◎天長節

維れ明治二十七年十一月三

日我皇四十
二回の降誕日
を重ね給ふ伏
して惟れ我
皇獻慮神武の
資を以て大統
を襲かせ給ひ
帝國の光輝を
宇内へ發揚し
今や又帝國の
安泰を富峰の
名に比し東洋
の和平を太平

看護の甲斐に益荒雄か
感涙止め敢て
嗚呼再御國へ歸る日ハ
天顔に咫尺一國民に
勳功視さん嬉しさい
衛生團乃賜も乃よ
病苦を扶くる其功德
入福田乃最上ぞ
敵を破るも國の爲め
軍人救ふも國の爲め
されハ 天皇皇后乃
軍隊衛生に寄せ給ふ
大御心を奉体志
勵めや勵め衛生團

◎鴨綠江

尊かりける皇の
御稜威方は四方に輝て

我か日乃本の丈夫か
旭の御旗翻へし
向ふ戦の鋒先よ
靡かぬ草のあるへしや
如何なる城も落しけり
如何なる岩も破れけり
進めや進め大小の
筒の響に山川も
どよめき渡り進む
雨や霰の丸の中
死を顧みる人ぞなき
進み進みて草の蒸す
屍となるも退きて
生ん心の人ぞなき
進めや進め清國の
心太くも頼とて
岩の數の限りなき
是ぞ名高き九連城
渡れや渡を鴨綠江
渡をや渡れ鴨綠江

の名も比せん
とし車駕親し
く廣島も臨ま
せ給ふて満清
の頑迷を磨懲
し給ふ時會々
斯佳節も逢ふ
軍國多事の際
宴を豊明殿も
賜ふさきも列
國の使臣は今
や我れも参貢
せんとす嗚呼

又盛ある哉
◎金州城の
陷落
第二軍の花園
河口も上陸す
るや無人の境
を行くこと數
十里遂も旅順
の中樞たる金
州城を陷落し
て此も愈々海
陸大舉旅順口
も向ふも至り

編者曰く、此歌ハ第一軍司令官山縣大將が九連城に於て天長節の佳辰の當
日詠せられしものにして軍隊悉く唱歌して遙かに
天皇陛下の万歳を祝きたるものなり

◎九連城と鳳凰城との陷落

虎伏す韓山踏とあらし
旭の旗の旗風も
落ち行く敵ハ九連城
風は清と日の御旗
いざ縦横も薙らふん
又もや向ふ鳳凰城
敵もあになく散さきて

龍住む鴨水打ち渡り
秋の木の葉の夫あらで
夢もぞ見ぬれ古満州
霜は寒と日本刀
難あく之を乗取りて
勇敢無双の我が軍に
雲り霞か朝霧の



ぬ記臆せよ時
は維れ十一月

十有六日

◎民政廳

含雪將軍狂廳
の如く安東附
近の霜林を捲
き去るや直ち
ふ府廳を開き
小林壽太郎氏
を以て知事と
さし父老を慰
撫して新政を

施く之を第一

民政廳とす
次で獨眼將軍
の金州を陥落
する又府廳を
開き荒川已次
氏を以て知事
とせり之を第
二民政廳とす
嗚呼滿清の野
十八省府廳の
數へて千に至
るもの庶くは
幾きよあらん
快あるかる

晴るか如く消にまけり
海に陸地は戦へは
驕れる龍も逃け隠れ
光り輝く日乃御旗
仰かぬ國やなかるらん

◎旅順乃月

硝煙彈雨今何處
大濤小波は打響き
折りく清く聞ゆるそ
遙かあふたを眺むれば

嗚呼故國を出しより
乃ち勝ちて勇むなり
四百余州の山河に
仰かぬ國やなかるらん

砲聲呐喊今何處
月影寒し旅順口
誰が玉章の雁あらむ
三笠の山は見へねども

月影寒し大海原

嗚呼泰平二十年
都大路の小女子の
知らぬ異國に打渡を
今宵の喜び誰か知る

歌へよ飲めよ我か勇士
酒を伊丹乃富士見酒
豪氣凜々隊堂々
やがてぞ衝かむ北京城

花の莖は酒の宴
眺むる月と思ひに
棚を横へ眺むる

飲めよ歌へよ我か勇士
肴は血汐の髑髏
明日は彼の水横切りて
やがてぞ衝かむ北京城

◎旅順占領 嗚呼鳳輦親征してより僅に數旬陸海の士氣大に振ひ錦旗の偉光赫奕として胡滿四百州を射る 陸に於ては平壤九連又何ぞ數ふる暇あらん海に於ては豊島黃海已に彼の海軍を撃破せり而して清國に依て以て安しとしたる旅順口は明治廿七年十一月廿一日を以て陥落せり嗚呼是れ支那滅亡の日歴史に特筆大書すべきの處何ぞ其れ快絶壯絶あるや 思ふに我第一軍の奉天府を陥れ山海關を一躍して烟樹蒼茫の間は北京城を望むの時は正に是れ第二軍及海軍が渤海灣を占領し太沽天津を陥落し了るの秋にして茲に兩々相對して愛親覺羅氏の社稷を巨砲一撃の下に崩壊し去るの時たらん天下の快事こゝに至りて極まれりと謂ふべし 嗚呼壯絶 嗚呼快絶

明治廿七年十二月十二日印刷
 明治廿七年十二月廿一日發行

版 權 所 有

發行者 日本橋區橋町一丁目一番地
 編輯者 神田區仲猿樂町八番地
 發行元 日本橋區橋町一丁目一番地
 印刷者 日本橋區新和泉町一番地
 印刷所 日本橋區新和泉町一番地

大草常章
 岡野英太郎
 松榮堂書店
 瀧川三代太郎
 今古堂活版所